

妙法寺旧参道入口燈籠



〔指 定 年 月 日〕 昭和五七年一月一日
 〔種 別〕 有形民俗文化財（信仰）
 〔名 称〕 妙法寺旧参道入口燈籠
 〔点 数〕 一对
 〔所 有 者 等〕 妙法寺
 〔所 在 地 等〕 和田三―五四―一二
 和田三―五五―三〇

妙法寺旧参道入口燈籠

基台から宝珠まで総高五・六五mの青銅製の大燈籠で、妙法寺の旧参道入口の標識として信者の寄進により造立されたものである。

妙法寺は江戸時代から堀ノ内の「厄除けのお祖師様」として人々の信仰を集め、その賑わいは浅草の観音様に匹敵したともいわれている。明治二年（一八八九）に甲武鉄道（現中央線）中野駅が開業すると、青梅街道の鍋屋横丁からの道に替わって、中野駅からの道が新たな参道（桜新道）となった。しかし道筋がわかりにくく参詣人がまごつくため、明治三六年（一九〇三）にまず木製の常夜燈が立てられ、その後、明治四三年（一九一〇）に至って信者の中の花柳界の人々が中心となって木製の常夜燈にかえて、青銅の燈籠を造立した。明治時代のこの参道は環状七号線の完成により分断され、往時の面影をすっかり失ってしまったのは惜しまれる。

「大かな燈籠」と称される本燈籠は、妙法寺の信仰の広さ、あるいは殷賑さを示すとともに、参道口の変遷や花柳界の人々の信仰・経済力を証する有力な資料である。

【文化財所在地】

